

中等国語教育における文部省唱歌利用の可能性

——教室からの実践報告——

山名 順子

キーワード・中等教育 国語 文部省唱歌 教育実践の記録 伝統的な美文

要旨

学習を通して、多くの生徒が苦手とする日本古典文法の学習の糸口とした。本稿では、全体の試みから二例を紹介する。

一、はじめに

本稿は、都内の私立女子中高一貫校における中学校一年生の国語（平成十七年度～平成十九年度）および神奈川県私立女子一貫校における高等学校国語総合、高校現代文の授業（平成二十三年度～平成二十五年度）において、明治大正期の文部省唱歌を利用した、のべ四年間の教育実践の記録である。中学学習指導要領（平成二十三年度施行）および高等学校学習指導要領（平成二十五年年度施行）の改訂に伴い、国語教育の現場では、継続的に日本古典文学や唱歌を教材とすることとなった。そこで、歌詞が「伝統的な美文」そのものであり、「読む」「歌う」という活動を通して親しみやすい文部省唱歌の教材利用を提案する。教室では、歌詞の解説を通じた内容の理解、実際に歌うことによる内容の実践、また、風景を描くなど、想像力を養うことを目指した。また、歌詞の

文部省唱歌の暗唱を、教室で実践しようと思いついたのは、二十年前に自身が中等教育を受けた時分の経験による。少なくとも中学校の三年間は、学期毎に「今月の歌」と題された資料が配付された。資料にはいくつかの唱歌が印刷されており、授業のはじめに斉唱を行い、年に六回の試験で習熟度が試された。唱歌の中には、その時に初めて接し、その後の人生でも全く耳にしないものもいくつかあったが、現在でも記憶の中にとどめられており、何かの拍子に脳裏に蘇るものも少なくない。

唱歌の多くは、日本古来のリズムである「七五調」を採用

している。中村佳文氏は、この「七五調」のリズムが、「自然とことばを脳裏に遺す」とすると同時に、歌の暗誦とは、歌の意味内容を意識することなく発声を行う状態であり、内容理解を目的としたワークシヨップなどの学習活動が必要である、と述べている。^二つまり、教室における唱歌の暗誦とは、単純に歌詞を暗記することと、歌詞の内容理解を通じた学習とを可能にするのである。のみならず、明治大正期の唱歌には、伝統的な美文が使用されており、文語の調子に触れ、言語生活を豊かにする可能性に富んでいることは、若井勲夫氏の論考に詳しい。^三このことから、唱歌の斉唱は、多くの生徒が苦手と感じる古典学習の糸口となる可能性もある。

文部省唱歌を利用した授業の実践には、すでに福嶋美知子氏に報告がある。福嶋氏は、唱歌を日本文化および異文化理解の有効な方法ととらえ、日本の大学で学ぶ留学生を対象として、『ふじの山』『雪山賛歌』など「山」の歌を例に、各国の童謡などと比較しながら、日本文化理解の端緒としての唱歌利用について述べている。^四唱歌の歌詞を吟味し、理解することは、日本の古典文学や、伝統文化を理解するためにも有効であると思われる。

文部科学省による新学習指導要領の実施に伴い、小学校は平成二十三年度、中学校は平成二十四年度、高等学校は平成二十五年度から、国語の授業時間を実質一割程度増加した。

そのなかで、特に、中学校では「日本のことわざ、古文・漢文の音読など古典に関する学習を充実させる」^五こと、高等学校では「伝統や文化に関する教育の充実」として、「古典、武道、伝統音楽、美術文化、衣食住の歴史や文化に関する学習を充実」^六させることが奨励されている。そこで、過去の実践をふまえ、今後の中等国語教育のなかで、文部省唱歌を利用することの可能性について考えたい。

本稿は、平成十七年四月から平成十九年三月および平成二十三年四月から平成二十五年三月の、のべ四年間、都内の私立女子中高一貫校における中学校国語および神奈川県私立女子一貫校における高等学校国語総合・高校現代文の授業において、明治大正期の文部省唱歌を利用した教育実践の記録である。また、これらの唱歌利用が、伝統的な美文の理解や、日本古典文法の学習への端緒となる可能性についても考察する。

二、唱歌利用の目的

唱歌とは、明治五年（一八七二）の学制頒布以来用いられていることばで、「楽器に合わせて歌曲を正しく歌い、特性の涵養情操の陶冶を目的とする教科目」およびその教科に用いられる歌曲を示す語である。^七本稿における「唱歌」は、後

者を指す。堀内氏、井上氏によれば、明治以来の「唱歌」は、初等・中等の学校で教科用にもちいられ、日本語でうたわれる、主として洋楽系の短い歌曲であり、歌詞は教訓的、美的な内容を持つものであったという。すなわち、唱歌の暗誦は、現代では耳に馴染んだ洋楽系の音階にのせて日本の伝統的美文に接し、吸収する機会であると言える。実際に斉唱を行うと、「思っていたよりも簡単に歌える」「テンポがよくて、楽しい」などの感想を得ることができ、手応えを感じた。内容の難解さに比べて、覚えやすく、歌いやすい曲調をもつ唱歌は、現代の中等教育における日本古典および明治文語文への入口としても、適当な教材であると思われる。それと同時に、授業の最初に斉唱を行うことによって、生徒の注意が授業へと集中し、唱歌の斉唱を省いた時よりも、単元学習への移動がより潤滑に行われる実感も得ることができた。

また、唱歌は、現在の小学校・中学校の音楽の授業でも、教材として取り入れられている。福島美知子氏のいうように、唱歌とは日本人のこころのふるさとであり、実際に利用した唱歌のほとんどが、生徒にとってもまったく知らないものではなかった。例えば、高野辰之作詞・岡野貞一作曲の『春の小川』および『紅葉』は、小学校三年生時および小学校四年時の音楽教科書に採用され、教室でも知らない生徒はいなかった。これらの唱歌をとりあげるとは、「既知のもの」

を再度検討し、慎重に吟味する作業である。これによって、これまで気づかなかった物事をあらためて知るといふ経験を促し、今後の学習生活における、過去に知ったものに対する興味と「気づき」を育てることが可能となると考える。実際に、いくつかの唱歌を歌った後に、複数の生徒から、「自分たちの歌っている校歌について、より詳しく知りたい」という質問を受け、後に改めて解釈の機会を設けた。授業後のアンケートでは、「校歌の内容をあらためて知ることができたのは、とてもよかった」という主旨の意見がいくつか見られ、成果を感じた。

唱歌は、伝統的な美文を歌詞とするとともに、歌詞の内容には、日本の情緒や、「日本の伝統文化」との関連も多く見られる。そこで、唱歌の歌詞について学習するとともに、現代の生活の中では失われつつある日本の伝統文化についても紹介を行い、生活の中に根付く日本の伝統文化への注意を喚起したいと考えた。今回の試みでは、五月の「鯉のぼり」を、端午の節句と結びつけて指導を行い、一定の成果を得た。六月以降は、長期休暇や試験期間などとの兼ね合いから、唱歌との関連とは関係なく、七月の七夕、九月の重陽などの五節句や、学校の所在地と関連の深い、西の市などの年中行事や年末年始の習俗などに関して個別に資料を作成し、配付して解説を行った。これらの試みに関しては、別稿に述べる予定である。

三、唱歌の選定方法および実際に使用した唱歌

はじめて唱歌の利用を実践したのは、中学一年生を対象とした授業の中であった。唱歌を選定するにあたって気をつけたことは、それぞれの季節にあった唱歌を選ぶこと、比較的表现の古い、明治・大正期の唱歌を使用すること、また、歌詞に政治的な内容が含まれていないことの三点である。^{二一}また、当時使用していた教科書の内容にあわせて、二点の唱歌を選出した。配付資料に印刷する唱歌の歌詞および譜面は、岩波文庫『日本唱歌集』に拠った。以下に一覧を付す。

子 順 名 山

【中学一年生】

- 四月 『花』 武島羽衣作詞・滝廉太郎作曲
- 五月 『鯉のぼり』 文部省唱歌
- 六月 『夏は来ぬ』 佐佐木信綱作詞・小山作之助作曲
- 九月 『野なかの薔薇』 近藤朔風訳詞・ヴェルナー作曲
- 十月 『故郷の空』 大和田建樹作詞・スコットランド民謡
- 十一月 『紅葉』 高野辰之作詞・岡野貞一作曲
- 一月 『雪やこんこ』 文部省唱歌

【高校生（二年目）】

四月から十月までは、中学一年生に同じ。

- 一月 校歌
- 二月 『あおげば尊し』 文部省唱歌

【高校生（二年目）】

- 四月 『春の小川』 文部省唱歌
- 六月 『箱根八里』 鳥居悦作詞・滝廉太郎作曲
- 九月 『植生の宿』 里見義訳詩・ビショップ作曲

四月の歌『花』は、日本人の生活や精神に深く根差す「桜」との関連から選んだ。特に、中学一年生や高校一年生にとつては、入学後はじめて学ぶ唱歌として、季節にあつた桜というテーマは親しみやすく、適切なものであつたと思われる。

五月の歌『鯉のぼり』は、小学校一年生^{二三}および五年生^{三四}時に学ぶ昭和唱歌ではなく、大正時代の尋常小学唱歌から採用した。歌詞に難解な部分が多いが、日本の伝統文化の理解や、歌詞の中に頻出する中国文学由来の故事などについても解説を行い、日本文学と中国文学との関連性についても学ぶことができる^{三五}と考えたため、選出した。

六月の歌『夏は来ぬ』では、歌人佐々木信綱の抒情的な歌詞から、描かれた風景を想像しながら季節を感じ取ること、歌詞の中にちりばめられた夏に関する単語に注目し、歌語や季語などとの関連性について考えることを求めた。

九月の歌『野なかの薔薇』は、中学一年生の使用教科書に掲載されていたヘルマン・ヘッセ作『少年の日の思い出』^{一四}にあわせて選んだ。明治時代の唱歌に採用されたヴェルナー作曲の楽譜とあわせてシューベルトの楽曲を紹介したほか、ゲーテの原詩も紹介した。この作業と同時に、当時出版されたばかりのヘッセの新訳^{一五}を示し、訳者や作曲者によって作品の印象が大きく変化することを題材として、言語表現への興味と注意を養うことを促した。

十月の歌は、前回採用したものと同じ外国曲の中から、音響信号機にも採用されている『故郷の空』を選んだ。また、同曲は、二〇〇四年九月に公開された映画『スウィング・ガールズ』の劇中曲にも使用されたことから、二〇〇五年当時に小学校高学年から中学校一年生に在籍していた生徒たちにとつては、特に親しみやすい一曲となったようである。

十一月の歌『紅葉』は、生徒の要望から、すでに耳になじみのある楽曲のひとつとして選んだ^{一六}。また、歌詞の解説を行うにあたって、日本文学の中でも伝統的な景物のひとつである「紅葉」について、古典の授業で暗記課題のあった『小倉百人一首』のなかから、いくつかの和歌に関連付けた説明を行った。

一月の歌『雪やこんこ』は、二〇〇五年度の『国語』教科書に掲載されていた『雪やこんこ、あられやこんこ』^{一七}に登場

した唱歌である。本文中には「雪やこんこ、あられやこんこ、降っても降ってもまだ降りやまぬ」という、二番の冒頭のみ掲載されていたため、明治時代の尋常小学唱歌（二）に掲載された全ての歌詞を示しながら、多くの生徒の記憶の中にある現代版の歌詞との比較、吟味を行った。

高校生用の一月の歌は、校歌である。長期休暇後であるため、あたらしい唱歌ではなく、日ごろ親しんでいる校歌の解説を行った。ただし、歌詞が口語文であったことから、試験等には反映していない。

高校生用の二月の歌は、卒業式に使用する唱歌『あおげば尊し』を採用した。ただし、試験等には使用せず、歌詞の文法解説や、内容の吟味にとどめた。

高校生用二年目の四月の歌は、小学生時に授業で習得したものが多く、平易な表現をもつ『春の小川』、六月の歌には、漢文学に典拠を持ち、活発な印象の強い『箱根八里』^{一八}、九月には、『故郷の空』同様に外国曲であり、里見義が訳詞を手がけた『埴生の宿』を、それぞれ採用した。

四、唱歌を利用した授業の方法

初回は、授業時間五〇分のうち、約二〇分を使用して、唱歌について学ぶ。まず、唱歌の歌詞および楽譜をプリントし

た印刷資料を配布し、歌詞を黙読させる。その後、テープやCDを利用した模範歌唱、もしくは教師が独唱を行う。次に、それぞれの唱歌について質問を行い、知っていることや、わからないことを発表させる。

【質問例】

- ① この歌を、以前に歌ったことはありますか。
- ② この歌を、以前に聞いたことはありますか。
- ③ この歌は、どのようなことを歌っていますか。
- ④ この歌の中で、わからないことはありますか。

【解答例】

- ① ・あります。小学校（中学校）の授業で歌いました。
・ありません。初めて聞きました。
・きいたことはあるけれど、歌ったことはありません。
- ② ・あります。スーパードカかかっていました。
・映画で聞きました。（『故郷の空』）
・信号の歌です。（『故郷の空』）
- ③ ・桜とか、花見とか、春の歌という感じがします。（『花』）
・薔薇と子供の歌です。なんだか痛いです。（『野なかの薔薇』）
- ④ ・全然わかりません。

・「げに一刻も…」はよくわかりません。（『花』）
・「たちまち竜に…」は、かつこいいけれど、意味はわからないです。（『鯉のぼり』）

これらの質疑をふまえて、全員で歌詞を音読し、歌詞内容の詳説を行った後に、再度模範歌唱を行う。二度目の模範歌唱の際には斉唱を促し、二回目の授業からは、授業開始後約二分を利用して、毎回斉唱を行う。また、一回目の授業後、歌詞や内容に関する質問には、^{一九} 随時応じる。

また、斉唱の際には、個人の裁量で徐々に暗誦へと移行するように指導し、中間試験および期末試験で暗記問題を課して習熟度をはかる。まず、歌詞の中から教箇所を空欄とし、その中あてはまる歌詞を、歴史的仮名遣いや漢字表記に配慮して正確に答えさせた。採点は比較的厳しく行い、歌詞の内容が正確である場合にも、漢字かな表記の混乱や、句読点の脱落などがあつた場合には減点を行った。この採点方法は、生徒には大変不評であつたが、それと同時に、ひとつの文章を、聴覚と視覚との両面から注意深く観賞、記憶することのたすけとなり、たとえば授業中に課する教科書音読の際にも、句読点の「間」や、漢字のよみの正確さに興味を持ち、以前よりも丁寧な音読を心がけるといふ結果へとつながつた。

また、この採点方法をとつたところ、全体の八割程度の生

徒がほぼ正確な解答を行っており、短期的な唱歌の暗記には一定の成果があったといえる。

五、教室における実践の記録

本項では、これまでに使用した唱歌の中から、『花』『鯉のぼり』の二曲について、教室での実践の記録を紹介したい。

(1) 『花』(四季) (明治三十三年) 掲載)

『花』

春のうららの隅田川、のぼりくだりの船人が
權のしづくも花と散る、 眺めを何にたとうべき。

見ずやあけほの露浴びて、 われにも言ふ桜木を、
見ずや夕ぐれ手をのべて、 われさしまねく青柳を。

錦おりなす長堤に くるればのぼるおほる月。

げに一刻も千金の 眺めを何にたとうべき。

授業における唱歌利用の開始にあたって、日本の春には欠かせない景物である「さくら」に取材した滝廉太郎の『花』

を選んだ。まず、授業の冒頭に「日本文学における桜」という資料を配付して、古今和歌集の素性法師歌や、芭蕉の句、梶井基次郎『桜の樹の下には』冒頭など、日本文学に数多く残されている桜に関する記述のごく一部を紹介し、それと同時に江戸時代の花見の風景を見て、気づいたことを発表させた。桜を眺める人々の中に、敷物を敷いて飲酒し、酔って躍る人物を発見した生徒からは、「現在とあまり変わらない風景に驚いた」との感想も引き出せた。この作業を通して、日本人が長く桜を愛し、春の景物としていつも気にかけていたことを実感させたいので、次に『花』の歌詞を紹介した。

『花』を知らない生徒はほとんどいないであろうことも狙いのひとつだったが、実際に前出の質問①および②を行うと、「歌ったことがない」「何となく聞いたことがある」という回答もあり、驚いた。CDを利用した模範歌唱に続いて、大多数の生徒が参加して斉唱を行い、その後、歌詞の内容について質問を行った。指名をうけた生徒には、「内容が古めかしい」「二番、三番の意味がよくわからない」と答える者が多かった。

そこで、ふたたび「日本文学における桜」の資料に戻り、隅田川の花見について簡単に説明してから、二番と三番の歌詞の説明を行った。まず、二番の歌詞には、対句表現が使用されていることを把握させ、次に、資料に掲載した素性法

師の歌「見たせば柳桜をこきまぜて都ぞ春の錦なりける」^{三二}を例に、桜と柳が春の景物であり、伝統的に日本文学にセツトで登場するものであることを示した。そのうえで、次に三番の歌詞に移動し、「錦おりなす長堤」というのは、隅田川兩岸の「桜」と「柳」について叙述しているものであることを理解させた。また、「おぼろ月」というのは、春に特徴的な月の姿態であり、春の季語であること、『朧月夜』という唱歌もあることを紹介した。

最後に、質問にもあった「げに一刻も千金の」について、解説を行った。まず、この歌詞は、北宋の漢詩人蘇軾の詩「春夜詩」の第一句に由来することを紹介した。次に、「春夜詩」の全文を示し、解説を行った。全文は以下のとおりである。

子 順 名 山

春宵一刻值千金 花有清香月有陰

歌管樓台声細細 鞦韆院落夜沈沈^{三三}

今後、漢詩を学ぶ中学一年生および高校一年生に対しては、この詩の詩形が七言絶句であることを示し、内容の説明を行った。すでに詩形などを習得済みの高校二年生、三年生に対しては、詩形の確認を行ったのち、押韻の確認と、内容の説明を行った。説明に対して、生徒からは、「今まで、こんなに一生懸命歌詞を考えたことはありませんでした」^{三三}「なん

で突然国語で歌を歌わないといけないんだろう、と不満だったけれども、思っていたより面白かったから、これからもいろいろ知りたいと思いました」など、比較的好意的な感想を引き出すことができた。

試験実施時には、第一連の「隅田川」「眺めを何にたとうべき」および、第二連の「われさしまねく青柳を」、第三連の「錦おりなす長堤に」を暗記問題として課したほか、歌の題名『花』および、作曲者名「滝廉太郎」を答えさせた。また、高校一年生には『春夜詩』の詩形、高校二年生および三年生には、第一句である「春宵一刻值千金」を答えさせた。初回の試験であったこともあり、正解者は非常に多く、特に「滝廉太郎」は、漢字に間違いはあるものの、二〇一一年度の試験では、約八割の生徒が記憶しており、^{三四}今後の学習にむけての手応えを感じた。

(2) 『鯉のぼり』(尋常小学唱歌(五))(大正二年)掲載

『鯉のぼり』

菟の波と雲の波、重なる波の中空を、

橘かおる朝風に、高く泳ぐや、鯉のぼり。

開ける広き其の口に、舟をも吞まん様見えて、

ゆたかに振う尾鱗には、物に動ぜぬ姿あり。

百瀬の滝を登りなば、忽ち竜になりぬべき、

わが身に似よや男子と、空に踊るや鯉のぼり。

第二曲目の唱歌となる『鯉のぼり』を歌うにあたって、日本古来の行事のひとつである「端午の節句」を紹介した。まず、江戸時代の浮世絵や、滑稽本などから多くの画像を選び、貼り合せた資料を準備して配布した。また、歌川広重の浮世絵『名所江戸百景』から、鯉のぼりが大きく描かれた「水道橋」を紹介したうえで、配付資料の画像のなかに「鯉のぼり」「柏餅」や「五月人形」や「菖蒲」があることを確認、発表させ、現在からみて二百年前には「端午の節句」が今の形と非常に近くなっていたことを説明した。一方で、「菖蒲打ち」や「鍾馗」など、現在では失われつつある風俗も紹介し、生徒の家庭で過去に行われた端午の節句に関する行事について自由に発言させた。多くの生徒が、「ペランダに弟のための鯉のぼりを飾りました」「五月人形を買いました」「柏餅を食べました」と発表するなかで、「菖蒲をお風呂に入れて入りました」という生徒もあり、他の生徒に「菖蒲はどこでかえるの?」「お風呂にいられて、臭くない?」などと質問されて盛り上がる場面も見られた。また、端午の節句が「五節句」

のひとつであることを説明し、他の節句についても簡単に解説をしたところ、「それぞれの節句が近づいたら、また同じような資料を配って解説をしてほしい」という希望が多く出たため、その後も、七夕・重陽・人日・上巳の節句および、十一月の酉の市と年末年始の主な行事や習俗に関する資料を作成、配付して試験にも反映させた。

歌詞の解説で、特に難しかったのは「薨の波と雲の波」を、屋根瓦のうねりと雲の波の類似からくるものだと理解させる箇所であった。現在の住宅事情から、生徒の多くが高層住宅や、現代的な住宅に居住しており、屋根瓦を理解させるのに時間がかかった。そこで、実際に通学に使用される主要な路線に乗って情景の理解を促す風景を見出し、生徒には「A駅とB駅の間にある風景をよく見てみて下さい」と解説した。また、漢文学との関連として、まずは第二連の「舟をも呑まん」とは、『莊子』に登場する「吞舟之魚」という、常人をはるかに超越した才能をもつ人物を示す語に由来する^{二五}ことを説明し、後半部分に「大きな人物は、些末な事に動揺しない様子である」という意味を持たせていることを解説した。また、つづく第三連に歌われている「百瀬の滝を登りなば、忽ち竜になりぬべき」とは、『後漢書』の中にある「登竜門」の故事によること、鯉が急流である竜門の滝を登り切ったなら竜になることができる、という伝説から、現在では特に立

身出世のための関門という意味で使用される語であること、「鯉の滝登り」が、「鯉のぼり」の語に通じることを解説した。これらの解説をふまえて、端午の節句に歌われる『鯉のぼり』には、男子は大人物たれ、竜門を登る鯉に擬えた鯉のぼりのように、立身出世せよ、という意味のあることを説明した。生徒からは、「難しい歌詞だけれども、とてもかっこいいと思います」という感想のほか、「男子だけにむけられているなんて、差別だと感じました」という、現代に育つ女性らしい、厳しい意見も寄せられた。

六、おわりに

「鯉のぼり」について、「旧暦五月五日に行われた端午の節句にもとづく景物である」としたうえで、高校一年生には「端午の節句」のよみを答えさせ、高校二年生、三年生には節句に関する景物を答えさせたところ、正答率は比較的高く、全員が楽しんだ授業内容は、比較的よく覚えていることもわかった。

子

順

名

山

試験実施時には、『花』と同時の出題となった。まず、記

憶問題として、第一連の「薨の波と雲の波、重なる波の中空を」を、全文ひらがなで答えさせたほか、第二連の「ゆたかに振う尾鰭には、第三連の「百瀬の滝を登りなば」、「空に踊るや鯉のぼり。」を解答させた。「空に踊るや鯉のぼり」と、第一連の「高く泳ぐや鯉のぼり」を混乱した答案が見られたほか、第一連の解答に際する「ひらがな」の指示を見落としたり例があつたが、概ね正答率は高く、生徒の緊張と意識の高さがうかがえた。

ところが、第二問目で、「吞舟の魚」のよみと、意味とを答えさせたところ、正答率は約五割と激減し、日々暗誦している歌詞の内容から離れた部分には、生徒の注意が向きにくいことがわかってきた。その一方で、歌の題名になっている

文部省唱歌を利用した現代文教育を実践していくうちに、生徒からは多くの感想が寄せられた。「全く興味なかった外国民謡について勉強していくうちに、もっと知りたいと思うことが多くなってきました」「季節の歌について知ることができて面白かったです」「毎月違う歌が楽しめました」といったものだけでなく、「ほとんどの歌は知っていたが、『鯉のぼり』は知らなかった。楽しく歌えたので今も覚えている。鯉のぼり、雛まつり、花のメロデーでそれぞれの歌詞が歌えることに気がついた」という、七五調の歌への鋭い観察を行う生徒もいた。また、中学一年生が高校生になってからも、「授業で歌った歌のなかに出ていた表現で、模試の文法問題が解きました」という、嬉しい知らせもあった。

ひとつの唱歌に対して、丁寧な紹介や解説を施すことに、

当初は疑問の声もあったが、今回述べることのできなかった『夏は来ぬ』の解説を行った後に、「授業のおかげで、季語や歌語がよくわかりました」「『枕草子』を読んで、これだ！と思いました」という報告もあった。近年では、唱歌が十代から八十代の人々に至るまで生涯学習に利用されているという報告もあり、世代を超えたコミュニケーションの一端として、唱歌を利用する可能性も考えうるだろう。

既に述べてきたように、毎回の授業開始時に、時季に合わせた明治期・大正期の文部省唱歌を斉唱することは、伝統的な日本語表現に触れる機会であり、同時に古典文学読解への糸口となる役割も果たすことがわかった。それと同時に、歌詞の内容に関連した日本の伝統行事や四季の行事などについてあらためて注目し、現代の日常生活の中に今なお息づく伝統文化への注意を促す好機でもあるといえる。事実、平成二十三年から一年間解説を行った結果、高校二年生約一〇人が、平成二十四年の夏季休業に伝統行事に関するレポートをまとめたほか、高校三年生が文化祭で『古き良きみんなの歌』と題して、唱歌の紹介と合唱を行い、好評を博すなどの成果があった。また、平成十八年度に担当した生徒からは、現在でも地元の酉の市にはかならず足を運ぶとの連絡もうけた。教師冥利につきる。

今後は、これまでの成果と、三回の実践を経て浮かび上

がってきた課題をもとに、さらに面白く文部省唱歌を紹介し、歌詞やメロディをより長く記憶できるように授業を展開したい。また、紙面の都合で今回紹介できなかった『夏は来ぬ』以降の実践についても、次の機会に紹介したい。

(講師 日本近世文学)

注

一 中村佳文『声で思考する国語教育〈教室〉の音読・朗読実践構想』ひつじ書房 二〇一二年

二 注一の中村氏論考に同じ。中村氏はこのなかで、竹内敏晴氏の教育実践を例にあげ、「春が来た」を例にとった内容の吟味と解釈の作業に触れている。

三 若井勲夫「唱歌・童謡と国語教育(上)(下)」(一九八八年十二月・一九八九年十二月)による。論考の中で、若井氏は、昭和六十一年の時点で、初等・中等教育の音楽から唱歌が多く姿を消し、歌詞の解釈指導が疎かにされたことを難じ、国語教育と音楽教育の双方における唱歌の積極的な利用を提唱している。また、若井氏は、現代文の教科書にも多く採用された近代以降の作家たちが作品中に唱歌を多く利用していることも指摘する。(若井勲夫「唱歌と現代文学(一)」「(三)」京都文教短期大学研究紀要第三十五号「三十七号 一九九六年十二月・一九九七年十二月・一九九八年十二月」)

四 福嶋美知子「教室からの報告 ―唱歌・童謡を取り入れた授業の試み―」『拓殖大学日本語紀要』第十三号 二〇〇三年三月

五 文部科学省ウェブサイト「幼稚園教育要領、小・中学校学習指導要領等の改訂のポイント」による。(平成二十五年八月二十二日参照) http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_jcsfiles/afidfile/2011/03/30/123473_001.pdf

六 文部科学省ウェブサイト「高等学校学習指導要領の改訂のポイント」による。(平成二十五年八月二十二日参照) http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_jcsfiles/afidfile/2011/03/30/123473_001.pdf

七 堀内敬三・井上武士「解説」による(『日本唱歌集』岩波文庫 緑九二一 岩波書店 一九五八年)。
八 注七の堀内氏・井上氏論考による。
九 注四の福嶋氏論考による。

子 順 名 山
一〇 東京芸術社、東京書籍、教育出版の音楽教科書に掲載されている。(平成二十五年十二月現在)

一一 堀内氏・井上氏によれば、唱歌の歴史のなかでは、日清戦争(一八九四〜九五年)および日露戦争(一九〇四〜〇五年)以降に隆盛した軍歌の流行があり、明治二十四年七月刊行の『国民唱歌集』に軍歌の掲載がみられる。文部省は戦意昂揚のためにこれらの軍歌を利用したという(注五の堀内氏・井上氏論考による)。林癸未夫氏によれば、実際に、明治初期の唱歌集の中には軍歌が多く含まれ、その分別は困難であったとされる(林癸未夫「明治初期の唱歌と軍歌」『書物展望』八号 一九三八年)。その後も軍歌や唱歌は、植民地政策などにも積極的に利用され、岡部芳広氏は、台湾における音楽教育を「皇民の道の修練であり、国防に資するための訓練、すな

わち皇民化のための音楽教育」と定義している(岡部芳広「植民地台湾における公学校唱歌教育」明石書店 二〇〇七年)。そこで、今回の選定にあたっては、これらの要素を極力排除し、四季折々の花鳥風月を歌ったものや、教科書の内容に沿ったものを選ぶことにとめた。

一二 小学校一年生向けの東京書籍の音楽教科書に、「にっぽんのうた こころのうた」のひとつとして紹介される。

一三 東京芸術社、東京書籍、教育出版の音楽教科書に掲載されている。(平成二十五年十二月現在)

一四 ヘルマン・ヘッセ作 高橋健二訳『少年の日の思い出』(光村図書『中学校国語1』二〇〇六年)

一五 『クジャクヤママユ』(ヘルマン・ヘッセ全集)第六巻 臨川書店 二〇〇六年)

一六 注一〇に述べたとおり、多くの出版社で小学校四年生時の教科書に掲載される。(平成二十五年十二月現在)

一七 佐々木瑞枝『雪やこんこ、あられやこんこ』(光村図書『中学校国語1』二〇〇四年)

一八 『箱根八里』の斉唱および試験は、高校三年生のみを対象として実施した。一方で、高校二年生には六月の歌を設けず、前期期末試験では『夏は来ぬ』についての設問を課し、一年経過後の状況確認を行った。

一九 注三の若井氏論考には、国語教育において唱歌を「詩」として教材化すること、また、音楽教育においては「歌詞をまず詩として音読、黙読する、難しい歌詞の意味を知る、リズム、抑揚や構成、展開を考える、その内容や情景をつかむといった作業を経て、曲想を行かした歌い方の工夫をして、表現(歌うこと)に入っていくのがよい。」との意見がある。実践した

- 指導法との共通点などもふまえ、今後の課題としたい。
- 二〇 佐山半七丸・速水春暁斎『都風俗化粧伝』（東洋文庫 一九八二年）
- 二一 『古今和歌集』五十六番歌による（『新編国歌大観』第一卷「勅撰集・歌集」角川書店 一九八三年）。
- 二二 山本和義『蘇軾』（『中国詩文選』十九 筑摩書房 一九七三年）
- 二三 注三の若井氏論考「唱歌・童謡と国語教育」にも、「荒城の月」歌詞に対して、高校三年生生徒による同様の感想が見られる。
- 二四 高校一年生二十八人中二十三人、高校二年生二十一人中十五人、高校三年生二十四人中二十二人が正答した。（正答率約八割二分）
- 二五 『日本国語大辞典』第二版には、「舟をまるのみにするほどの大きな魚。転じて、善悪ともに、大人物・大物のたとえ。」とある。
- 二六 兎束淑美「生涯学習における童謡・唱歌の位置づけ―地域における活動の歴史と必然性―その1」（『上田女子短期大学紀要』一九九号 一九九六年三月）

なお、本稿における唱歌の歌詞は、堀内敬三・井上武士『日本唱歌集』（岩波文庫 緑九二― 岩波書店 一九五八年）によった。